

## 豊年や吾は老残の黄金仏

伊藤伊那男

（令和五年作・句集『狐福』北辰舎刊）

伊藤伊那男さんは昨年十一月に逝去された。その後を追うように本書が送られてきて驚いた。「銀漢」追悼号を読むと、同人たちで原句チェックをし、伊那男さんと意見交換などをして、すこしでも完璧な最後の句集を目指されたとのこと。最後の二年半は胆管癌で「内臓の地図が変わるよ  
うな」手術をされた由、この作業は伊那男さんらしい弟子たちとの最後の真剣な個人授業であったのかもしれない。私自身は、晩年の伊那男さんとは神保町の「銀漢亭」で季節ごとの句会を途中入会で共にさせていただいた。メンバーは私以外は俳人協会系の主宰たちだったが、皆率直に意見を交わす中で、伊那男さんは、伝統俳句の骨法を守りながらも、俳句の自由度にも理解が深かった。また、素材の鮮度を生かした手料理も絶品で楽しみの一つだった。さて、本句集には、早逝された妻へのやわらかな思いの〈初夢の妻に長生きなどを詫ぶ〉、銀漢亭を閉じた時の切実な気持ち吐露した〈花冷の痛みきまでに此の年は〉などもあるが、〈熟るるまで仏に預けおくメロン〉〈吾が骨も団扇

の骨もあらはなる〉〈山芋が粘り播鉢ごと廻る〉などのユーモアの句もあり作者の晩年の心の在り方が見える。

その中で、老いと病への視線の深まりも印象的だ。冒頭に引いた句は、「黄疸を発症」との前書が付くが、このゆとりある諧謔には、〈糸瓜咲て痰のつまりし仏かな 子規〉の絶句をふと思いついた。「豊年」と世の豊穰を言祝ぎながら、「老残」の身を「黄金仏」と輝かす。しかしながら、これは黄疸の身を明色で諧謔的に表現したもの。事実を超えた詩的豊かな黄金仏が俳句形式によって造形された。

もう一句、〈芭蕉忌の曾良とも頼む点滴棒〉は、「胆管癌の手術を受く」の前書がある。点滴棒の存在感を芭蕉にとつての曾良とみなした発想にもゆとりがある。逆境を前向きに捉えた伊那男さん流の諧謔と言えよう。

これらのゆとりある対象への視線は、〈大南風心して吹け御座所跡〉〈庭裏は吉野へつづく鹿おどし〉〈金継ぎのごと毛野国の稲光〉などの吟行句にも、〈土を出て土の一穢もなき蚯蚓〉〈息継ぎであらむ秋蝶よく止まり〉〈冬蝶に此岸を掴む力かな〉など小動物観察の心優しい句にも見られる。

最後に、作者の原郷である信濃への挨拶句と、井上井月への思いをたっぷり含んだ句を引いて筆を措く。〈寒鯉を食うて信濃の血を濃くす〉〈井月の杖の先々蝗跳ぶ〉合掌